

根岸英一著「時代を拓くコンセプト - 日本の若者に競争を与えよ - 」

Voice、2011年1月号 PHP 研究所 2010年12月10日発行を読む

かつてのような競争社会に日本を戻せ

Q ご自身が住んでいたときと現在の日本を比較されて、何が根本的に変化した、とお感じになりますか。

A (根岸)日本を離れたのは1966年です。とにかくあのころは、若い人が野心的でしたね。いまの日本人も変わらず能力は高いと思いますが、かつてのようなやる気が感じられない。当時は国全体にやる気が^{みなぎ}っていました。

Q 海外に出る人、留学する人もどんどん減っています。

A 信じられないのは、いまでは下手に海外に行くと、日本にいたら得られるだろうポジションに就けない、ということです。その話を聞いたときには驚きました。それでは若者の目が海外に向かなくなるのも当然でしょう。ということは、そもそも会社はほんとうに有能な人を活用しようとしているのか、ということになる。もちろん先ほどいったように、若いうちに留学したからといって、その人に能力があるかどうかはわかりませんが、とにかくもっと才能がある人を年齢に関係なく、積極的に使ったほうがいい。

Q いま一度、日本が海外に目を向けるためには、どのような心構えと準備が必要ですか。

A まず日本国内における教育で、コンペティション(競争)が少なくなっていることが問題です。若者というのはそういう競争にポジティブに反応しますが、逆に日本の教育は、若者から競争を奪おうとしているように思えてなりません。サイエンス・オリンピックなどもありますが、やはり教育のなかで、もっと競争するという経験を与えたほうがよい。そこで「できる」ことは楽しいものです。

かつてと違っていま、私は入学試験を称賛しています。国内で競争を避けていたら、このグローバルな時代に世界的な競争を行なえるはずがない。かつての寺子屋などをみても、日本は学問に対する志向性が高い国です。「ゆとり教育」など絶対にダメでしょう。

Q ますます進展するグローバル化のなか、隣国である中国や韓国に比べても、大きく日本は取り残されている印象を覚えます。

A 韓国はかなりの競争社会になっていますが、できる人は競争させることで伸びるものです。だからこそ、かつてのような競争社会に日本を戻し、アメリカのように超優秀な人を伸ばす社会構造にする必要がある。

Q 日本人の特性を活かし、世界に冠たる国家であり続けるため、いまこれをやるべき、というご提案はありますか。

A これからは英語がますます重要になります。もはや一流の科学者で英語ができない人はいません。もちろん専門のほうがるかに重要ですが、サイエンスの公用語、共通語は英語ですから、英語ができなければ話にもならない。現状では日本語が大きなヒンドランス(障害)になっている、といわざるをえないでしょう。

よほど好奇心が強く、科学者だけではなく、日本文化、日本語にも強い関心をもつ人でなければ、世界から日本に研究者はやってこないと思います。だから土壌も育たない。理科の授業は英語で行なうということも、一つのアイデアかもしれません。

P36 ~ 37

[コメント]

「理科の授業は英語で行なうということも、一つのアイデアかもしれません」というコメントを根岸先生からあった。私は日本中の それから各国事情の授業を日本に留学中の大学生はアルバイト講師としてやってもらったらいいと考える。そのくらい日本での英語による授業は少ない。

- 2010年12月3日 林明夫記 -